

# ナイチンゲール搾精日誌



DOJIN  
R18  
成人向け

18歳未満の  
購入・閲覧禁止

「マスター。あなた<sup>ペニス</sup>の男性器には異常がありません。」

ナイチンゲールが廊下でおくびれもなく話し始めたので僕は面食らってしまった。

「ここ最近のマスターを観察したところ、陰茎部に異常な肥大が見受けられます。」

…た、確かに露出狂まがいのサーヴァントがいっぱい加入してつい勃起はしちやってたけども！

人理修復機関カルデアの存続は、生真面目かつ剛腕なナイチンゲールに支えられているといっても過言ではない。彼女はこの組織に絶対必要なメンバーだ。けど、婦長が何を考えているのか正直よくわからないことがある。

根はいい人だとは思うけど…

「毒による状態異常か魔力の悪影響の可能性が有ります。今すぐマスターのルームで検査を。」

グイグイ押しして来る彼女に気圧されてしまった僕は断りきれずに従ってしまった。

マイル川ムに入った後、僕は婦長から  
体の隅々までバイタルチェックを受けていた。

「身体機能に異常は無いようですね。」

次は問題のペニスの検査に入ります」

僕は困惑しつつも、フル勃起してしまっていた…

「まず測定から。勃起長約15センチ。太さ4センチ。

睾丸、鶏卵大。日本人平均をやや上回ります」

「触診の結果、ペニスは健康と判断。

特記事項・恥垢から極めて強い性臭。」

うう…恥ずかしい…

「結果を報告します。陰部の肥大は

毒・魔法の影響ではありませんでした。

異常勃起は旺盛な性欲によるものかと」

そっか、よかった……のか？

「しかしこれを放置することは

今後の任務に極めて悪影響が

ある恐れがあります。」

「よって、応急処置を行います」

「形状は上反りで勃起硬度は極めて強。

また著しくエラが張っています。」

婦長は淡々とちんぼのデータを読み上げていく。

手袋越しの温かい手に触れられ

僕は軽くイキそうになってしまった。

婦長はどこから出したのか  
素早くコンドームをちんぽに付けると  
ぬっこぬっこ♡としごき始めた。

「溜まった性欲を吐き出す方法は  
これだと文献に書いてありました。」

「さあ、出しなさい。  
溜め込んだ精子を、  
一滴残らず、全て。」

僕のギンギンに勃起したちんぽを  
婦長は事務的だけど容赦なくしごいていった。

凄い。すげーすげーすげー。  
おっぱい、柔らかい。  
手袋、すべすべ。  
婦長、いい匂い。

童貞が処理しきれない情報量で  
頭が真っ白になってしまった僕は…

どぷっ……どびゅっ！  
びゅーっ♡びゅーっ♡  
びゅーっ♡びゅーっ♡

…魂が抜けるほどの快感を感じながら  
コンドームに大量発射していた。

「…短時間で6回もの射精とはさすがに想定外でした」

初めてのエッチな体験に脳がバグった僕は、  
婦長の無表情手コキで  
馬鹿みたいに射精してしまった。

「それにこの精液量。  
文献と明らかに異なります。  
驚異的な生殖能力と言えます」

婦長が持つつしりとしたそれは、  
まるでぼくの性欲を具現化したようで  
とても恥ずかしくなっていました。

「この尋常でない繁殖能力では  
カルデア女性職員に危害が  
及ぶ可能性があります」

そ、そんな人をレ○プ魔みたい…

「決めました。  
明日からマスターの精子は  
全て私が回収いたします。」

…この瞬間、僕はナイチンゲールに  
射精管理されることが決定づけられた。

婦長は検査のためと言って  
コンドームを全て持ち帰ってしまった。



「…昨日あれだけ射精したのに  
どういうことですか？」

翌日、再検査に来た婦長は呆れていた。  
ちんぽがまたフル勃起していたからだ。

僕は思い出しオナニーを何回しても  
勃起が治まらない事情を説明した。

「なるほど…これは  
治療のステージを  
上げる必要がありますね」

すると突然、婦長は  
僕のスポンを下ろした。

「男性は『フェラチオ』ですぐに果てると聞きました。  
今日は徹底的に治療します。」

ちんぽがぬるつとした感触に包まれた瞬間、  
体験したことのない快感に僕は仰け反った。  
婦長が僕のちんぽを咥えている…!!  
女の人の口って、こんなに温かいんだ…!

ずぞぞ♡じゅぽ♡じゅぽ♡  
効率的に搾り取るためか  
普段の婦長からは想像できない  
エグいバキュームフェラが始まった。  
「さあ、一滴残らず射精しなさい」

ぐっぽ♡じゅっぽ♡じゅっぽ♡

搾精するための容赦ないフェラチオ。

こんな気持ちいい事、耐えられるはずがない。

「あっあっ♡ダメ♡出ちゃう♡」

びゅぶっ♡びゅく♡びゅー♡

僕は我慢できず、情けない声を上げながら  
何度も婦長の口に射精してしまった…

翌日カルデア内で婦長と出会ったけれど、  
昨日の事など気にも留めていないように  
淡々と職務をこなしていた。  
今までの事は夢だったのだろうか？

僕は自分の仕事そつちのけで  
その美しい横顔に見惚れてしまっていた。  
：なんだか最近、  
オーラというんだらうか、婦長の美しさに  
磨きがかかっているような気がする。

そういえば近づき難い雰囲気だから  
あまり意識していなかったけど、  
よくよく見るとナイチンゲールは  
もの凄い美人だということに気がついた。

美しい髪。長いまつ毛。燃えるような紅い瞳。

こんなに美しい婦長が  
僕にだけこっそりフェラチオを  
してくれているなんて…



搾精治療はどんどんハードになっていく。

僕は四つん這いのアナル舐め手コキで情けなく喘いでいた。

「男性はアナル責めで射精量が増えるそうですね。さあ、今日も出し尽くしなさい。」

ツリ目でクールな女性に醜態を晒して命令される。体の芯がゾクゾクした。僕はマゾなのかもしれない。

「理解不能ですが、男性はこれも好きなのでしょう」

婦長は射精感促進のためなら何でもしてくれらるらしく、なんとおっぱいまで見せてくれた。

すっご…でつか…やさし…すき…

興奮した僕はいつも以上に早くイッてしまった。

今日も僕は何発も射精した。

僕のアナルを嫌な顔ひとつせず

ほじくってくれる婦長。

本当に治療行為で説明がつくのだろうか？



あの日以降、僕は  
ナイチンゲールに夢中になっていた。

何かにつけて僕は  
カルデア内で婦長に  
へこへこ腰を振っていた。

「お願いナイチンゲール、  
セックスさせて……！」

快楽に味をしめてしまった僕は、  
恥も外見もなく婦長に懇願していた。

「性行為は精液の排泄とは

別行為に当たると思いますが」

「でもちんぽがずっと辛くて

任務に身が入らないんだよ……お願い婦長！」

精液を効率よく搾り取るためならば、

カルデアのためであるならば、

無茶な要求も受け入れてくれるはず。

僕は少し大胆になりつつあった。

「二回だけ！一回で満足するから！」

「……わかりました。

任務に支障が出るようでは

致し方ありません。

業務終了後、部屋で待っていて下さい。」

僕はナイチンゲールで童貞を捨てた。

セックスの作法なんて分からずあたふたしたけれど  
婦長がぬるぬるのアソコにそつと僕を誘導してくれた。  
にゆるんとちんぽがおまんこに入る。  
初めての女の人の中はとつてもあたたかく、  
信じられないほど気持ち良かった。

腰を進めて柔肉をかき分けるたび  
全身に電流が流れるようだった。

ちんぽを一番奥まで入れると僕は、  
達成感と快感で動けなくなってしまう。

するとナイチンゲールのおまんこが  
ちゅうちゅう吸い付いてきたので、  
僕はあっけなく射精してしまった。  
人生で一番長い射精だったと思う。

僕は脱童貞の余韻にしばらく浸っていた。  
セックスって射精の快感だけじゃなく、  
全身から多幸福感が溢れてくるんだ…

婦長は相変わらず無表情だったけれど、  
優しく見守ってくれているように見えた。



そのあとはもうめちやくちやだった。

僕は覚えたての快感を何度も味わいたくて  
射精一直線に腰を振り続けていた。

世の中にこんな「イイ」事があつたなんて。

一見同じ射精のように見えて

右手を動かすだけのオナニーとは全然違った。

腰をガツガツ打ちつけておっぱいを

ブルンブルン揺らすダイナミックな行為は、

生物の本能的な悦びよろこを呼び覚ますようだった。

「婦長…婦長！好き！」

「吐精に感情は不要です。

精子を出すことに集中して下さい」

ナイチンゲールは僕のぎこちない腰振りを  
静かに受け入れてくれていた。

「好き！婦長！好き！」

あっあっ♥また出るっ!!!」

ぶびゅ〜っ♥♥♥びゅ〜っ♥♥♥

僕はその日、コンドームが尽きるまで

一心不乱に腰を振り続けた。

おまんこの気持ちよさを知ってしまった僕は  
一度だけという約束もうやむやに  
猿のように婦長を求めるようになっていた。

今日も僕はレイシフト先の森で  
仲間たちに隠れて  
セックスをしていた。

野外でするセックスはまるで  
動物の交尾みたいでとても興奮した。

婦長の体は本当にどこも気持ちいい。  
僕は持参したコンドームが無くなるまで  
無我夢中で腰を振り続けた。

手コキよりもセックスの方が  
搾精の効率が段違いに良かったためか、  
婦長は黙って僕に付き合ってくれる。

僕が腰を振っている間婦長は  
「男性はこういう事が好きなのか」と  
興味深そうにじっと観察しているようだった。

今日も仕事の合間に婦長とセックスしていた。

相変わらず快楽に夢中になっていたけれど、最近、少しづつ長持ちするようになってきたし、腰振りのコツが分かってきた気がする。

ちよつとだけ余裕ができた僕は、婦長の膣内の色んな部分を味わってみることにした。

まずまんこの入り口は

ナイチンゲールの顔つきみたいにキツキツだ。

でも中に入れるとトロットロのまん肉が

柔らかく包み込んでくる。

まんこの天井はざりざりで、抜き差しするたびに

カリの一番気持ちいい部分を擦り上げてくる。

僕は突く深さを変化させてみたり

左右上下に腰をぐりぐりしてみたり、

ナイチンゲールの極上まんこを堪能した。

婦長も僕が動きやすいように

体勢を変えたりするようになったので、

だんだんセックスの息が合うようになってきた。

新宿特異点で仲間と別行動をとった僕達はこっそり下品なラブホテルに来ていた。ラブホは元の世界で行って見たかった憧れの場所だったからだ。

今日のプレイは婦長上位で動いてもらった。激しいピストンで搾り取られるのかと思ったけれど、ナイチンゲールは円を描くようにグリグリと腰をグラインドさせ続けていた。

「婦長……もうイキそう……！」

「ダメです。我慢なさい」

なぜか今日はいつもと逆に射精を我慢させられ続けた。

恋人繋ぎでホテルに入るとまるで本物の恋人になったみたいで僕は嬉しくなった。

夢ついでにえっちなナース服を土下座で頼んでみたら、

「なるほど、これが現代の看護服ですか」

と意外にもちゃんと着てくれた。

蛇の交尾のようなじつとりとしたセックスは一日中続いた。

今日のセックスはいつもよりたっぷり長かった気がする。

ラブホでのプレイ以来、ナイチンゲールは  
騎乗位を好んでするようになった。

ひと突きごとにナイチンゲールの  
形の良いおっぱいが揺れている。  
長い髪と華奢な身体は  
芸術品のように美しく、  
僕はうっとり見惚れてしまっていた。

以前は僕がへこへこ腰を振るのを  
黙って見ているだけだったのに、  
今では自分から積極的に動くようになっていた。

「んっ……んっ……♡」

最近、ナイチンゲールの  
声色が変わってきている事に  
本人は気づいているのだろうか。

「私がセックス好きになっっている？ありえませんが。」

あくまでカルデアのため、マスターの体調管理のためです。」

日課のラブキス対面座位をしながらナイチンゲールはそう怒った。

最近では唾液交換しながらポルチオをゆっさゆっさ♡するのがお気に入りだ。


「じゅるる…ちゅぱっ♡  
いいですか こうしてキスしているのは、  
ペロチューするとマスターの睾丸が活性化して  
より素早く搾精が進むからです♡」

そっか、そうだよな。

デカケツ揺らして汗だくになっているのも  
きつと僕の治療のためだもんな。

「戯言を言っつてないで さっさと今日の  
ノルマの特濃ザーメンひり出して下さい♡」





ナイチンゲールの尻を鷺掴んで  
後ろから思いきり突くと、  
悲鳴のようなあえぎ声を上げていた。  
…腹から仄暗い嗜虐心ほのぐら しぎやくしんが湧くのを感じた。

オスの硬い腰は、メスの柔らかい尻に  
ぶつけるように出来ているらしい。

僕はなんだか支配者になったようで  
いつも以上に激しく犯しまくった。

あれからずいぶん経った。

成長期にひたすらやりまくったためか以前より明らかにちんぽがデカくなっていた。

「ナイチンゲール、オレのちんぽ測り直してよ」

変わったのは俺だけじゃない。

ナイチンゲールはちんぽに従順な女になりつつあった。

「…ツツ♡…はい♡」

それでは失礼します♡

な、長さは♡に…21センチ♡♡

太さ♡…5センチ♡♡」

「ふーっ♡ふーっ♡スンスン♡

オスの臭いも更に濃くなって♡

金玉もさらにでっぷりしています♡」

俺のペニスは、経験豊富な

淫水焼け黒ちんぽになっていた。

自分でも驚くような成長に

俺は充実感で溢れていた。

「で、検査の所感はどうなの？」

「♡た、大変健康で素晴らしいかと♡♡

男性の上位0.1%に属するペニスと推定♡」

「ふーん…でも教えた呼び方と

違うよね？訂正して？」

「は、はい…♡失礼しました…♡

ち…ちんぽ…♡♡

**圧倒的なでかちんぽです♡♡**

俺はニンマリして婦長の頭を撫でてやった。

この自慢のでかちんぽで

このあと朝までやるつもりだ。

「おちんぽがお辛いでしようから

は、早く今日の搾精を始めましょう…♡♡」

すぐに挿入するのはなんだか癢しやくだったの、俺は主導権を見せつけるためにナイチンゲールの身体で遊ぶことにした。

「ん〜…今日はパイズリすればいっぱい精子出せそうなんだけどなあ」

すぐにハメてもらえると思っていたナイチンゲールはお預けを食らってモジモジしていた。

「そ、そうですか…♡  
精子の為なら…し、仕方ありません…♡  
私の乳まんこをお使い下さい…♡」

ぬっち♡ぬっち♡たぽっ♡たぽっ♡  
婦長の美巨乳でパイズリを愉たのしむ。  
この巨乳まじでエロ気持ち良すぎる。  
それに女にマウントする優越感は何物にも代えがたい。

ぎりり…♡ぎゅちっ…♡  
「んひひひひひひ♡♡♡」  
ナイチンゲールは乳首が性感帯になっていたようで、捻ひねつてやるとパンパン♡啼ないていた。

ナイチンゲールの特徴と言えば美しい顔だ。

俺は婦長の綺麗な顔を汚してみたくなった。  
脇見せ服従ポーズで上下関係を分からせた後、  
顔めがけて射精してやるのだ。

「あーイキそうー！精子いっぱい出るー！  
婦長の可愛い顔にぶっかけるよー！」

びゅぶ♥びゅっ♥びゅ  
っ♥

自分の薄汚い精液をナイチンゲールの  
顔やおっぱいにぶっかけると、  
ゾクゾクするような征服感で満たされた。

女性の尊厳を踏みにじるはずの顔射だけど、  
可愛いと言われたナイチンゲールは  
どこかまんざらでもなさそうに興奮していた。

ナイチンゲールのムラムラは限界にきているようだったが、俺はまだまだエロい身体で遊ぶことにした。

何週間にも渡るセックスの結果、婦長は手マンすれば簡単に潮吹き絶頂するチヨロまんこになっていた。

今日は婦長のブザマな姿を見たくなかったので

敗北ポーズで少し虐めてみることにした。

予想通り手マンでお手軽絶頂したようだ。まったく、吹いた潮を後で掃除させないと。

これだけ身体は降参しきつているのに、

看護婦というプライドがあるのか

治療という名目は頑なに崩さないようだった。

にゅちにゅちにゅち♡♡♡  
ぷしっ♡ぷしっ♡プシッ♡

「んおおおおおっ♡

こ、この行為は搾精とは無関係なはず♡

じよ、女性の体をおもちやにしていはいけませんっ…♡

んおオッ♡いぐッ♡イグッ♡♡♡♡」

よし、そろそろ

ほかトロまんこの出来上がりだ。

ついにお待ちかねの合体だ。  
ほかとろハメ待ちおまんこに  
ビンビンのちんぽを挿し込んでいく。

にゅぷぷぷ♡

「んおおおおお♡♡」

散々焦らされ続けていた  
ナイチンゲールは  
獣のような声で絶頂した。

下ごしらえをしつかりしてただけあって  
おまんこの具合は絶品だった。  
今までで一番きつい締め付けた。

ばちゅん！ばちゅん！

「んおっ♡おっ♡イグッ♡」

俺の長いちんぽで膣奥の  
ポルチオを殴りまくると、  
ナイチンゲールは連続絶頂から  
降りてこられなくなっていた。

もっとおまんこほじりを  
楽しめたかったが、  
俺も我慢の限界がきていた。

ベッドのスプリングを使い  
デカ尻にスパイクの腰を打ちつける。

どちゅ♡どちゅ♡どちゅ♡

「もうイクよナイチンゲール！  
膣内ナカに…出す!!」

びゅーっ♡ぶびゅーっ♡

俺はナイチンゲールの膣内ナカに  
思いつき中出しした。

俺は続けざまにムチムチの脚に抱きついて  
全身おまんこを愉しんだ。

婦長は全身が柔らかくて気持ちいい。  
ちんぽにクする雌臭も前より強くなってるし  
本当にちんぽの遊園地みたいな女だ。

そう言えば最近生セックスばかりしているが、  
回収していたコンドームは一体何に  
使っていたんだと問いただしてみた。

ナイチンゲールはもごも言い淀んでいた。

ピストンを激しくして更に追求すると、  
「持ち帰ってオナニーに使ってました♥」  
とついに白状した。

澄ました顔をしてなんていやらしい雌だ。  
職権乱用じゃないか。  
なんだか無性に腹が立ってきたぞ。

徹底的にこの淫乱女の仮面を  
ひん剥いてやりたくなった俺は、  
激しいピストンで二晩中啼かせまくってやった。

散々ハメまくった後、  
いつものようにナイチンゲールに  
まん汁と精子で汚れたちんぽを掃除させた。  
ついでに汗だくになった俺の身体も  
いたわ 労るように舐めあげさせた。

まるで王様になった気分だ。

最近は精力も絶倫になったおかげで、  
休日などは朝から晩まで  
ぶっ通してハメ続けることも多い。  
勃起ちんぽをフェラさせながら  
俺はもう明日のプレイを思案していた。

そろそろ道具も使ってみようか。  
アナル開発なんか面白そうだ。

ずるっ…べちやあ♥

精液が詰まったコンドームが  
婦長の尻からずり落ちた。

もうゴムをする必要は無くなっていただけ、  
「俺はこんなに射精できる凄いオスなんだぞ」と  
見せつけるために毎回数個は使っていた。  
使用済みゴムは男のトロフィーだ。



もちろんカルデアの任務も忘れてはいない。  
今日も世界を救うためにレイシフトだ。

任務地での激闘でヘトヘトになった俺達は、  
ようやく訪れた村で宿を取った。

俺は「体調が悪いので婦長に看病してもらいたい」  
という体で、他の仲間とは  
別の部屋をあてがってもらった。

当然やることはひとつだ。

ぎっしぎっしぎっし♡♡  
「んんん♡♡んぐんぐ♡♡ツツ♡♡」

死線をくぐり抜けた俺達はやりまくった。  
ナイチンゲールは隣の部屋に  
声が漏れないよう必死だったが、  
お構いなしにベッドを軋ませてやった。

結局明け方までセックスしまくった。  
騒音も一晩中凄かったし、  
二人から溢れる淫臭でマッシュ達に  
バレてしまったかもしれない。

ナイチンゲールは最近  
フェラチオが上手くなったように思う。

以前のような

精子を搾り取るためのフェラでなく、  
慈しむような、

まるで愛情たつぷりのフェラチオだ。

熱烈な金玉フェラで精子が

ぎゅんぎゅん作られるのがわかる。

吸っている間ずっと俺の目を見てくれる。

手をつなぐと、不思議とさらに

精子が増産されていくような気がした。

俺は毎日婦長をおもちやにしているのに、  
彼女は甲斐甲斐しく奉仕をしてくれる。

本当に…

ナイチンゲールにとって俺は  
治療対象というだけの  
存在なのだろうか？

ナイチンゲールは極上の名器だと思う。

他のまんこを味わったことなんて無いけれど、絶対そうだと思う。

入り口はキツキツなのに  
腔内では優しく締め付けてくれて、  
イクときは子宮が精子を求めて  
ちゅうちゅう亀頭に吸い付いてくるからだ。

今まで何百発搾り取られたかわからない。

…なににせよ もう他の女性と  
セックスすることなんて無いんだから、  
ナイチンゲールのまんこが  
俺にとって最高の名器なのは  
変わらないんだ。



今回の異聞帯は攻略に1ヶ月以上も掛かった  
超難関任務だった。

任務地の特性上、婦長はレイシフト出来なかったため  
俺はその間ずっとナイチンゲールと会えなかった。  
禁欲生活も含め、とてもタフな任務だった。

帰還後すぐに婦長を抱きたくなった俺は  
ひとまず風呂で身体を清めようと  
マイルームのドアを開けた。

そこにはドスケベな格好で準備万端な  
ナイチンゲールが待っていた。

部屋の中にはむせ返るような  
雌メスの臭いが充満していた。

この女も、1ヶ月間俺を待っていたんだ。

俺は理性がブチ切れて  
ナイチンゲールを押し倒していた。



俺達はケダモノのように貪りあつた。

ナイチンゲールは  
ひと月洗っていないちんぽに  
平気でむしゃぶりついた。

俺は猛獣のように肩に噛み付いて  
腰を振りまくった。

部屋にはオスとメスのえげつない  
臭いが充満していた。

なりふり構っていられなかった。

一ヶ月ぶりの柔らかい身体。  
一ヶ月ぶりの婦長の匂い。  
一ヶ月ぶりのキツキツおまんこ。

我慢なんてできなかった。  
俺はグツグツに煮えたぎった精液を  
ナイチンゲールに思い切り放った。

じびゅっ…♡びゅぼっ…♡  
びゅー…♡びゅー…♡  
ぶびゅるるるる♡ぶびゅっ♡  
びゅー…♡

…自分でも驚くほどの大量射精だった。  
全身がちんぽになったかのような  
深い深い絶頂だった。

だが二人の長い別離期間を埋めるには  
一回で足りるはずなんてなかった。

俺たちは精根尽き果てるまで交尾した。  
やってやって、やりまくった。

半勃ちちんぽをじゃぶらせながらひ  
ひと息ついていると、

「…本当に底なしの精力ですね。  
並の女性では耐えきれないでしょう。  
もし私がいなくなったら  
どうするつもりなのですか？」

ふいに彼女がそう呟いた。

ナイチンゲールがいなくなる…？  
俺の前から…？ずつと…？

考えたこともなかった。

…そんなことに耐えられるわけがない。

俺はその瞬間 脳みそが沸騰した。

萎えていたちんぽが一気に勃起し、  
ナイチンゲールを押し倒して  
めちやくちやに腰を振りたくっていた。

ナイチンゲールは看護婦失格だ。

俺の精子を出し尽くすと言っておきながら  
逆にどどんん生産させてしまう無能だからだ。  
まったく許せない。

どちゅんっ♡どちゅんっ♡  
ドヌンツッホドゴンツッホ

「いの…いの!!  
俺がこんなになったのもっ!!  
お前が!お前が全部悪いんだぞ!!  
謝れ!!!謝れこのスケベ女!!」

「んおおおお♡ご…ごめんなさい♡♡  
スケベな女でごめんなさい♡♡」

俺は理不尽な謝罪をさせながら  
おまんこを折檻せつかんし続けた。

「謝るだけで済むと思うな…!!  
責任…責任取れ!!」

「せ、責任♡♡♡  
…ま、マスターの精子は♡  
これからもずっと私が…♡おっ♡」

そうだ。

ナイチンゲールは  
看護婦なんか辞めて、  
俺のオナホに就職すればいいんだ。



# ナイチンゲール搾精日誌

奥付

発行日：2023/12/31

発行者：虞犯少年

連絡先：GuhanShounen(Twitter)

印刷所：株式会社サングループ